



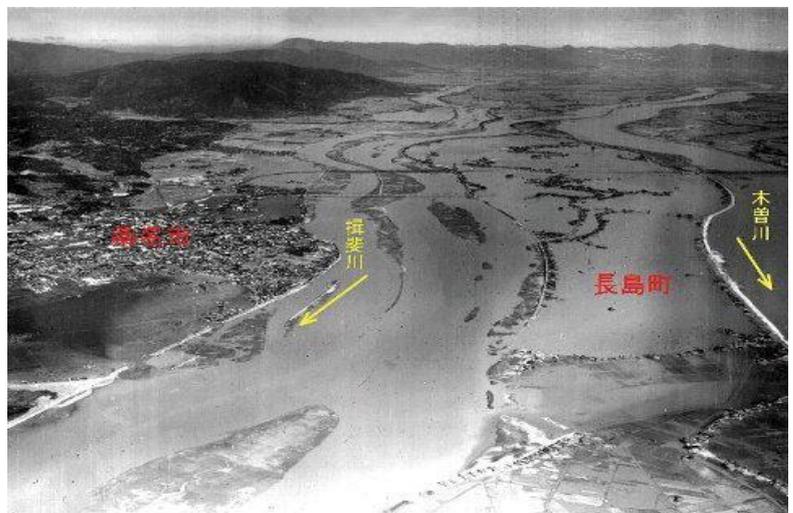
伊勢湾台風 昭和34年（1959）9月26日

和歌山県潮岬付近に上陸、紀伊半島を縦断した伊勢湾台風は、東海地方を中心に“明治以来最大”といわれる深刻な被害を各地にもたらしました。これを契機として「災害対策基本法」が制定されるなど、日本の防災史にも大きな影響を与えた台風となっています。

堤防を破壊した高潮、
全国で5,000人以上の命が失われた超大型台風。

伊勢湾台風を語る上で、欠かすことができないのが「高潮の被害」です。強風による吹き寄せと低気圧による吸い上げ効果によって起こった高潮は、名古屋港において、観測史上最高となるN.P.5.31m(名古屋港基準面)の潮位を記録。伊勢湾沿岸の防波堤や海岸堤防に、猛烈な高潮が襲いかかりました。全国で死者・行方不明者は、5,000人以上になり、1995年の阪神・淡路大震災まで戦後の自然災害では、最大の被害となりました。復旧工事にあたっては、木曾川河口付近・海岸部での高潮堤防の高さを原則7.5mとするなど、伊勢湾台風の潮位、波高を踏まえて、高さや構造が決められました。

海拔0メートル地帯では、台風後も長い間浸水状態が続きました。海部郡南部周辺では、決壊した堤防が修復され排水が完了するまで、120日間以上にわたり浸水状態が続き、浸水区域の被害を一層大きくしました。



台風の猛威は想像を絶し、被害は広範囲・長期に及んだ。

被災者は全国で120万人